

# 教 仏 庵 草

第197号  
(発行日)  
2006年11月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》  
○ 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日および12日  
午後3時より。  
○ 真宗共学会―――毎月第一と  
第三木曜日午後7時より。  
\* 8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます

## 真宗問答(二十八) 至心信樂のお心

K 「一切衆生を助けようとの阿彌陀仏の本願の根本である第十八願に〈至心・信樂・欲生我國〉の文があります。これの文は至心に信樂して、我が国に生ぜんと欲ひて」と読み下されていますが、この思し召しをもう少し詳しくお話しく下さい。まず〈至心〉とはどういう意味ですか」  
D 「至心について聖人は『尊号真像銘文』に  
至心は、真実ともうすなり。真実ともうすは、如来の御ちかいの真実なるを至心ともうすなりとお示し下さっています」  
K 「如来の誓願が真実であることを至心といわれるのだと聖人はお示しなのですね。南無阿彌陀仏のお助けが真実であるということはどこで知れますか」  
D 「それをよく知らされるのは法蔵菩薩の願行成就についての釈尊の説法です。法蔵菩薩は一切衆生を仏に成らしめたいと願われ、四十八願を起こし、その願を成就せんがために、兆載永劫という永いご修行を一人一人の衆生の仏因成就のためになされました。私たちが仏になる修

行は、私たちに到底できなくていつまでも生死の苦しみからでられないのを悲しみ哀れみたまいて、身代わりとなつて法蔵様が修して下さいました。この修行を仕上げても私どもを救う南無阿彌陀仏になられたのであります。ですからひとたび南無阿彌陀仏と聞く人は、(ああ、私が浄土に生まれる因は阿彌陀仏が全て仕上げ下さり、必ず往生させると喚んで下さっている)と知らされるのです」  
K 「そうすると如来様が法蔵菩薩とまでなつて、私の往生を引受て下さった、そのお知らせが南無阿彌陀仏のみ名なのですね」  
D 「ええそうです。ここを聖人は『教行信証』に元照律師の言葉としてお示し下さっています。その現代語訳ですが  
《まことに、阿彌陀仏は因位のときから、願をたて、志をかたく守り、行をきわめ、はかり知れない長い時をかけて、衆生を救おうとする慈悲の心をいだかれた。そして、芥子粒ほどのわずかな場所であっても、衆生救済のために自らの身を捨てて行を修めていかれなかつたところはないのである。智慧と慈悲を兼

ねそなえた六波羅蜜の行を修め、すべてのものを導いて摂め取り、余すところがない。その身心もあらゆる財宝も、持つておられたものはすべて求められるままにお与えになった。このようにして、機が熟し縁が生じ、行が満足し、功德が成就して、一時にさとり身をまどかに成就されたのである。そのすべての徳がみな阿彌陀仏の四字にあらわれているのである》

過ごせませんが、とても仏になるような清らかな心はできてきません。聖人は、如来法蔵様が人間には清浄真実の心がないことを見られ、私たちに代わつて菩薩行をされたことを  
一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし。虚偽諂偽にして真実の心なし。ここをもつて如来、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまい  
とお述べになつています。」  
K 「ここで穢悪汚染というのは何ですか」  
D 「食欲・瞋恚・愚痴の煩悩で私たちの心が汚れていることです。私たちは生を愛し死を憎み、常に自分と自分たちのために外に欲求して生きています。もの足りた、もの足りたといと走り回っています。だいたい、いつまでも元気で生きておきたいという心の元に生への食欲がありましよう。そのために金銭と肉体に深く執着しているのではありません。また名声や性愛も求め、さらに娯樂をあちこちに求めて

K 「法蔵菩薩は、私たちに代わつて真実の行いをして下さった、それほど私たちには真実がないということですね」  
D 「ええ、私の心はまことに虚仮不実で妄念煩惱ばかりです。この世の生活は仮の、その場限りの親切心やまごころで何とか

### 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日(金) 午後二時始まり

法話・念佛寺住職

います。こうした多くの欲望がかなえられないと欲求不満になります。どこまでも生きたいという欲求はかなえられませんが、死んでいかねばならないことは自分にとって一番の嘆きであります。また経済的に豊かになりたいと思ってもなかなかそうはいかないので、不足が起こります。身体の楽を求めても身体が衰えてくると思うようにならず、(なんでこんな体になつたのか)とグチがでてきます。また周りの人に対しては(もつと私のことを大事にしてほしい)(俺の言うことを聞いてほしい)など、いろいろな期待や欲求を突きつけますが、自分が期待するほど人は応じてくれません。だから周りの人に対しては(もいらい)だちや不満が起こります」

\*

K 「では清浄の心が無いというのは」

D 「穢悪汚染ですから、当然清らかな心ではないわけです。利己的な欲望によって心が汚くなっています。ですからお金にも汚くなり、利害損得の心で人につきあいますから人間関係も純粋な友情で交わることは難しいのです。にもかかわらず人からは(あの人はいい人だ)と思われたいのです。また男女の性愛の心も強いのであります。そういう欲望によって私たちの心は汚染されています」

K 「虚偽諂偽というのは」

D 「うそ、かり、へつらい、いつわりという心は、私たちの人間関係の底にある心でありましよう。不幸に陥っている人のところに行つて親切な言葉をかけるのですが、言っている言葉ほど内心は同情していない。(大変です)ね」といつてもたいはいはその場限りであります。しかもこうした親切な言葉で相手を慰めるなかにも相手にたいして(自分はいい人間だと思われたい)というへつらいがひそんでいきます。(虚偽諂偽にして真実の心なし)とは非常に厳しく人間の心を暴いてくださっているお言葉です」

K 「人への小さな親切や慈悲心はその場では当てになりそうですが、その親切心を当てにしすぎるとそれこそ当てがはずれて、かえつてみじめな思いになることがあるとあります」

D 「人間同士の愛情は移り変わりやすく、またもろいものです。このような人間の姿の底を阿彌陀仏は見られて、人間(衆生)には清浄な心も真実の心もないこと、また、清浄真実な心になりたいたいと真剣に願いまじめに精進する心もないと見られているのでありましよう。聖人は『唯信鈔文意』に「しかればわれらは善人にもあらず、賢人にもあらず。賢人といふは、かしこくよきひとなり。精進なるころもなし。懈怠のころのみにして、うちは、む

なく、いつわり、かぎり、へつらうころのみ、つねにして、まことなるころなきみなりとしるべしとなり」と仰せられています」

\*

K 「それゆえ、この本願力は、衆生のすがたのありのままを知つた上で、如来の真実心より成就した力であるから(真実間違いないゆえ)信じてくれよとおすすめ下さるのが(至心に)のお心ですね。次に(信樂)のお心は何ですか」

D 「信樂とは本願を信ずる心のことです。この信樂も聖人は凡夫の心ではなくて阿彌陀仏のお心だと頂かれました。弥陀の本願念仏は一切衆生を救う真実であり、その南無阿彌陀仏を阿彌陀仏は信じ切つて私たちに与えて下さるお心でありましよう。信樂は疑いの無い心で、この南無阿彌陀仏で一切衆生が助かることに疑いが無いゆえ、どうか

くあなたを助けること、そのことに全く疑いが無いから、どうかこの南無阿彌陀仏をすなおに受け取つてくれよとのおすすめでありましよう」

\*

K 「本願を信ぜよとおすすめになられても私はなかなか信じていることができませんが」

D 「阿彌陀仏は私どもの心の中に清浄真実の心も、信樂する心もないことを徹底的に見通され、信心のないものに、真実の信心を与えようとされています。ですから私は信じていることができませんとの訴えは、すでに阿彌陀仏はご承知なのです」

K 「ではどうしたらいいのですか」

D 「どうしたらいいかというより、どうにもならない自分、信心の起こしようもない自分自身の姿を知らしていただくことです。本願を信じる力もない私は本当に助かる手がかりもない苦しみの境界を出離できる縁なき身と知らせていただくことです」

K 「本願を信じていることもできないゆえ出離の縁なき私なのですね」

D 「ええ、そんな私が私の本性。無仏法で無信心で、まさに逆誘の死骸が私の本当の姿なのです。さあそんな私に今のお念仏がどう仰せ下さるか。それ一つを聞くのです」

K 「仏法で助けていただくとしても、その仏法を信じている

ができない、実に仏法の叛逆者であるのです。その私に南無阿彌陀仏がどう仰せ下さっているか、それが大切なのですね」

D 「ええそうです。助からぬ身に、弥陀はなんと仰せ下さっているか」

K 「どう仰せ下さるのですか」

D 「(真実の信心のない汝の心はすでに承知している、そんなおまえだからこの南無阿彌陀仏で助けるぞ、引き受けるぞ)との仰せであります。この思し召しをお聞かせいただくのです。ですから阿彌陀仏の(信ぜよ)は、信じたなら救う、信じなかつたら救わぬというような、私たちに信心でもつてふるいにかけてくれるのではありません」

K 「真実がからさしなく信心の起こしようのない、救われ難き私をすでにお見通しの上で、(そんなお前だから助けに来たのじやないか南無阿彌陀仏)と仰せ下さるのですね」

D 「そうなんです。信じられない、真つ暗闇に落ちて行くしかないような者に、(そんなお前を助ける、一切引き受けるから、どうか弥陀をあてたよりにせよ)のお心が、(至心に信樂して)のお心であります。それはもはや私の方から何かお助けのお手伝いをするのではなくて、(助けるで我にまかせよ)と聞かせていただくのであります。お聞かせのままを聞くばかりであります」

(了)

# 歎異抄 第一章第五講

弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとすべし。そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

(歎異抄第一章より)

(現代語訳)

阿弥陀仏の本願は老いも若きも善人も悪人も分けへだてなさいません。ただ、その本願を聞きひらく信心がかなめであると心得なければなりません。なぜなら、深く重い罪を持ち、激しい煩惱をかかえて生きるものを救おうとしておこされた願いだからです。

\*

〈罪悪深重煩惱熾盛の衆生〉とはだれか。まさしく我が身のことを仰せられているのである。しかし、なかなかこれが私の本性であるとは認めがたいのである。これは単なる自己反省や自己批判からでてくる人間観ではあるまい。まさに、如来法蔵様が五劫に思案し永劫に修行されたのは誰のためかというところから浮き上がってくる人間のすがたではなからうか。

\*

最近(「尊いいのち」という言葉が教団内外であふれていて、あたかも私の身が尊いようにいわれるが、しかし如来の見たもう人間は罪悪深重の身であろう。これは『無量寿経』の三毒五悪段を読むとひしひしと伝わってくる。

浄土教だけではない、だいたい仏教経典には、人間の身体をいとうべき穢き身であると至る所に説かれ、それゆえ我が身に愛着してはならないとしばしば説か

れているのである。そういう意味では現代人の身体観とは違うのである。

たとえば、『仏遺教経』には

「これはこれまさに捨つべき罪悪の物なり。仮に名づけて身と為す。老病生死の大海に没在せり」と、この身についての仏のお言葉がある。

罪悪の物、それが我が身だと。また『宝積経』には

「罪の身は深く畏づべし。

これはすなはちこれ怨家なり。

識ること無く耽欲の人は、

愚痴にしてつねに保ちて護る。

かくのごとき臭穢の身は、

なほ朽ちたる城廓のごとし。

日夜に煩惱に逼められて、

遷流してしばらくも停まることなし」とあり、この文は聖人の親しまれた『往生要集』にも引用されている。この身は罪の身であり、自分を苦しめる怨みや仇のようなものである。罪の身であつてい

べきものであるにもかかわらず、愚かな人はそれを知らず、この身をどこまでもかわいがり、執着している。しかしどれほど保持しようと思つても、身は日々に朽ちていくものであるから、凡夫は煩悩悩むのであるといわれている。

\*

私がかか悪いことをしたから、あるいは悪をするから罪の身というよりも、身そのものが罪なる存在だということ。なぜこのような身がこの世に生まれてきたか、生まれさせたのは何か、それについてサンユッタニカーヤ(雑阿含経に相当)にインドの神が釈尊に問う場面がある。

「(神いわく)何が人を生まれさせるのか?」

「(尊師いわく)妄執が人を生まれさせる」という。この妄執の言葉は雑阿含経では

(愛欲)と翻訳されている。愛欲とは欲愛、愛執、貪欲ともいい、欲望のことである。生きんとする盲目的な欲望が人としてこの世に生まれさせたものであるといわれるのであろう。

このことは仏教の五縁起という教えに、愛(欲)があれば取(とる)があり、取があれば有(生存)があり、有があれば身が生まれ、生まれると老死があるというプロセスで教えられている。人の身をもつて生まれる元(愛(欲))があるといわれている。これは釈尊や後の聖者たちが身体を智慧によつて深く内観し続けて感得されての教えであらう。今日の生物学のように身体を物として外から観察した見解ではない。

いわゆる肉体がまず生じて、そこから生きようとする欲望が生まれるというのが現代科学の考え方なら、生きようとする欲望が元にあつて、それが形に表れてきたのが生きものの身体であると見る見方も成り立つのではないか。

\*

身をもっているということは、欲愛が形を取ったものゆえに、身には眼・耳・舌・身(皮膚)などの感覚器官があるが、それらの器官から欲望が常に入っている。眼は(見たい)という欲望の吹き出す場所、耳は(聴きたい)という欲望の出入りする場所、舌は(美味なものを食べたい)という欲望がでる。皮膚は快適さや快楽をいつも求めている。こうした身体全体は生きたいという生存欲が根になっており、我が身を、欲望にひたる

(耽欲の人はつねに保ちて護らうとし、

生きるのを妨げるものを排除しようとする。

実際、生理学的に見ても、この身体は生きたいという生存欲が根になっていて、自身を護り、それを妨げものを排除するシステムになっている。

たとえば免疫系という個体の中に張り巡らされた防衛は、自己ならざるもの、細菌やウイルスなどが体に侵入してくると、それを非自己として排除する働きをもつ。その働きは、例えばリンパ球がある。リンパ球にはT細胞、B細胞、NK(ナチュラルキラー)細胞がある。

この細胞の中でT細胞は自己と非自己を識別する役割を担う。莫大な数のT細胞で自己を傷つけるおそれのある細胞を排除する。

T細胞は、ヘルパーT細胞(免疫反応を促進させる)、キラーT細胞(異物細胞を殺す)、サプレッサーT細胞(免疫細胞を抑制する)となつて、敵と戦い、自己を防衛し、自己を主張しているのである。

\*

生きるために常に自分を護らうと執着している身体は(思うも思わざるも妄念、造るも造らざるも罪体)といわれるが、しかしその罪悪の身(心)に真実(仏)が働くのであり、真実の働く場所が我が身(心)においてなのである。だからこの身が大悲の真実を映す器になるか、それとも煩惱のもやしどころで終わるかという課題を人の身は根本的にもつているのである。

この罪悪深重の身を救うて清浄真実の仏にしてやりたいというのが弥陀の本願である。罪悪深重のこの身に阿弥陀仏の慈悲がかかっているのである。(了)